

## 0. はじめに

語と語が構成する表現の意味が文字通りの内容を示すものから、段階的に徐々に元の意味を感じさせないものになっていくことを、その表現がイディオム化したと言います。本論では、イディオムの変遷の一端について、チョーサーでは文字通りまたは文字通りに近い意味で使われていたと考えられる表現が、ディケンズでは比喩的な意味になっているものについて考えます。それぞれの用例について文脈を読みながら、個々のイディオムの微妙な意味を考えるきっかけにします。ただし、今回取り扱う表現は聖書との関わりがあることが指摘されているので、聖書に見られる表現の変遷についても取り扱います。

### 0.1. 「総序の詩」に登場する郷土 (Franklin)

「総序の詩」に登場する人物の中に郷土がいます。この人物の描写の中に本稿において扱う "mete and drynk" が見られます。この郷土は高等弁護士の後に紹介されます。つまり、彼は、1066年以後の法廷の訴訟事件や判例や法令を丸暗記するほどの秀才であった高等弁護士の仲間としてその後に描写されます。高等弁護士のまだらの姿と異なって、郷土については、はっきりとした白色の特徴が直喩と隠喩によって語られます。州の知事で会計検査官をしていたと書かれているが、この人には不正があったとは思われません。医学博士と違って腹の座った人で、どうも自らの食生活については自分の健康を考えて細心の注意を払わなかったようです。彼は食道楽をたしなむことが生活信条であったようで、作者はその和やかな楽しい雰囲気を楽しんでいます。

Whit was his berd as is the dayesye;  
Of his complexioun he was sangwyn.  
Wel loved he by the morwe a sop in wyn;  
To lyven in delit was evere his wone,  
For he was Epicurus owene sone,  
That heeld opinioun that pleyn delit  
Was verray felicitee parfit.

.....  
His breed, his ale, was always after oon;  
A better envyned man was nowher noon.  
Withoute bake mete was nevere his hous,  
Of fish and flesh, and that so plentevous  
It snewed in his hous of mete and drynke;  
Of alle deyntees that men koude thynke,  
After the sundry sesons of the yeer,  
So changed he his mete and his soper.

.....  
An anlaas and a gipser al of silk,  
Heeng at his girdel, whit as morne milk. (I (A) 332-58)

(髭は雛菊のように白く、顔色は真赤でした。朝は葡萄酒にひたしたパンをとでも好んでいました。愉楽の生活が習慣になっていました。彼は、完全な快樂こそ真に完全無欠の幸福なり、との意見を持したあのエピクロスの申し子といってよい方でした。……この方のパンもそのビールも一様に上等のしろものでした。どこにも、これほどいい葡萄酒を倉に貯蔵している方はおりませんでした。家には魚と肉に果物、それにまた香料を入れた焼きパンがいつも備えてありましたが、それもじつにたくさん、家には食べ物に飲み物、人が考えうる限りのありとあらゆるご馳走がまるで雪の降るばかりに積っておりました。彼は季節の変るごとに食事のメニューをかえました。……両刃の短剣や絹の財布が朝の牛乳のような白い帯皮のところにぶら下がっておりました。)(梶井迪夫訳、以下『カンタベリー物語』の訳は梶井によっています。また、引用文中のアンダーラインは筆者のものです。)

ローマ大学教授Piero Boitani氏は、2009年10月31日から11月1日まで専修大学で開かれた平成21年度第5回国際公開講座「チョーサーとラングランド」において、チョーサーがダンテなどのイタリアの作家たちから影響を受けた自然描写について講演をされましたが、そこではチョーサーの自然の中で雪に関する描写については説明がなされませんでした。しかも、雪が降るイメージとご馳走とのつながりについては述べられることはありませんでした。「家には食べ物に飲み物、人が考えうる限りのありとあらゆるご馳走がまるで雪の降るばかりに積っておりました。」における、この雪のメタファーは、イタリアの作家たちの描写には存在せず、チョーサー的なものと考えられます。サンタクロースさながら、おびただしく降る白い雪のごとくみんなにご馳走を振舞う郷土の姿は、新鮮なイメージを提供してくれます。以上、ここでの "mete and drynk" は、文字通り

「食べ物と飲み物」であると解釈できます。

## 0.2. 『オックスフォード英語辞典』(OED)における "meat and drink"

今日の英語に存在している “meat” はもともと人間や動物が食べる食物一般を意味し、“drink” のような液状の食べ物ではなくて固形の食べ物を意味していました。そして、二つの語がワードペアとして and を挟んで対に使われることが多かったのです。それが「ころからうれしいと思うこと」のような比喩的な意味として用いられるようになりました。以下に『オックスフォード英語辞典』から該当箇所を引用します。

- 1. a.** Food in general; anything used as nourishment for men or animals; usually, solid food, in contradistinction to *drink*. Now *arch.* and *dial.* **green meat:** grass or green vegetables used for food or fodder (see *green a.* 4). See also hard meat, horsemeat, white meat. **meal of meat, meal's meat:** see *meal n.*<sup>2</sup> 1e.

**a900** tr. *Bæda's Hist.* v. iv. (Schipper) 568 He eode on his hus & pær mete [*v.r.* mæte] pygede. **c975** *Rushw. Gosp.* Luke xii. 23 Sawel mara is ðonne mett. **a1050** *Liber Scintill.* xlvi. (1889) 153 Nys rice godes meta & drinc. **c1175** *Lamb. Hom.* 135 Ne sculen 3e nawiht 3imstones leggen Swinen to mete. **c1200** *Ormin* 3213 Hiss drinnch wass waterr a33 occ a33, Hiss mete wilde rotess. **a1240** *Lofsong* in *Cott. Hom.* 205 Ich habbe i-suneged ine mete and ine drunche. **a1300** *Cursor M.* 898 Mold sal be þi mete for nede. **c1380** *Wyclif Wks.* (1880) 206 Alas, þat so gret cost & bisynesse is sette abouten þe roten body, þat is wormes mete. **c1440** *Pol. Rel. & L. Poems* (1903) 185 Thy mete shall be mylk, honye, & wyne. **1477** *Norton Ord. Alch.* v. in *Ashm.* (1652) 76 Without Liquor no Meate is good. **1578** *Lyte Dodoens* ii. xlvi. 205 These kindes of lillies are neither used in meate nor medicine. **1623** *Cockeram* ii, *Meate of the Gods*, Ambrosia, Manna. **1693** *Tate* in *Dryden's Juvenal* xv. (1697) 378 Who Flesh of Animals refus'd to eat, Nor held all sorts of Pulse for lawful Meat. **1775** *Johnson Journ. W. Isl.* 86 Our guides told us, that the horses could not travel all day without rest or meat. **1794** *C. Smith Wanderings of Warwick* 66 Sending out women and children, after a hard day's work, to collect meat for the cattle. **1819** *Shelley P. Bell* vii. v. 4 He had+meat and drink enough. **1844** *Stephens Bk. Farm* II. 709 Meat is then set down to them on a flat plate, consisting of crumbled bread and oatmeal. **1893** *Stevenson Catrion* a xxi. 253 When+my father and my uncles lay in the hill, and I was to be carrying them their meat. **1902** *Daily Chron.* 12 Dec. 5/6 Imports of fruit and other choice green~meat.

b. *fig.* in various applications. (Also in many passages of the Bible, e.g. John iv.32, 34, 1 Cor. iii. 2, Heb. v. 12, and in allusions to these.) **to be meat and drink to** (a person): to be a source of intense enjoyment to.

c1200 *Trin. Coll. Hom.* 27 þe þridde is for mete þat ilch man agh mid him to leden þan he sal of þesse liue faren, þat is cristes holie licame. a1340 *Hampole Psalter* vii. 5 Synful mannys lif is the deuels mete. 1497 *Bp. Alcock Mons Perfect.* Cjb/2 Obedyence is+the meete and comfote of all sayntes. 1533 *Frith Answ. More Ej*, It ys meate and drinke to this childe to plaie. 1600 *Shakes. A. Y. L.* v. i. 11 It is meat and drinke to me to see a Clowne. 1620 *T. Granger Div. Logike* 20 Idlenes is the meate of lust. 1693 *Humours Town* 5 Petty-foggers, and their Meat and Drink, the Litigious. 1837 *Carlyle Misc., Mirabeau* (1840) V. 139 But then his style!+ Strong meat, too tough for babes. 1855 *Browning Fra Lippo* 315 To find its meaning is my meat and drink.

まず、"meat" が食物一般を意味する最初の用例は、古期英語時代のベーダ『英国民協会史』から引用されています。中期英語に入ってからよく使われ、後期にはチョーサーと同時代に生きたウィックリフからの用例（1380年頃）があげられています。腐っていく肉体を蛆虫の "mete"（食べもの）と説明しています。近代英語においても継続して使われ、近代英語後期に入るとジョンソン博士からの用例（1775年）があげられています。馬たちが一日中休息や "meat"（食べもの）なしで旅を続けることができないと説明を受けた内容です。19世紀は詩人シェリーの用例やスティーヴンソンの例を取り上げています。このように、「一般の食物」から意味が狭くなって「食べものの中で食肉」に限られるようになっていく、「meat」は20世紀初めまで使われていたようです。

次に、"meat and drink" の比喩的意味は13世紀ごろから用いられています。特に英語の聖書に多く使われ、19世紀まで用例が見られますので、息の長い表現であることが分かります。聖書を中心によく使われる表現ということは、人々の心の奥底に定着したものであるということです。ここで、聖書に見られる用例を取り上げます。

### 0.3. 聖書における "meat and drink"

1604年にJames Iの支持を得て、1611年に完成された King James' Bible は『欽定英訳聖書』(Authorised Version) と呼ばれます。実質的には『ティンダル訳聖書』（1525 - 30）に基づいていると言われます。そこに "meat and drinke" が使われています。それが、20世紀の後半に英米で同時に翻訳された聖書では、"food and drink" と "eating and drinking" のように、慣用句を用いず現代の英語に合わせた訳語になっています。"meat" を新訳で使えば意味を取り間違える可

能性もあると考えられたのかかもしれません。

1611 Authorised Version:

For the kingdome of God is not meat and drinke; but righteousnes, and peace, and ioy in the holy Ghost. (Rom 14:17)

1989 New Revised Standard Version:

For the kingdom of God is not food and drink but righteousness and peace and joy in the Holy Spirit. (Rom 14:17)

1989 The Rivised English Bible

for the kingdom of God is not eating and drinking, but justice, peace, and joy, inspired by the Holy Spirit. (Rom 14:17)

(『聖書新改訳』(1973) なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊によるよろこびだからです。)

このように、聖書では隠喩的な意味を示す "meat and drink" が慣用的に使われてきましたが、20世紀後半の新訳ではそのままその表現が継承されず現代にふさわしい語 "food" や "eating" に訳され、それがメタファーとなっています。

#### 1. チョーサーにおける "meat and drink"

本論のはしがきに述べましたように、「序の詩」に登場する郷土の家に雪のように降る食べ物と飲み物を示すために "mete and drynke" が使われていました。チョーサーでは、聖書と違って文字通りに近い用法で用いられています。ただし、比喩的に使われる慣用句的表現を十分に予期させるものです。つまり、チョーサーのような作家はいつも言葉を有機的に利用する才能を持っています。

And mete and drynke this nyght wol I brynge

Ynough for thee, and clothes for thy beddyng. (KnT 1615-16)

(今夜は食物、飲み物をお前に十分なだけ持って来てやる。またお前に十分な寝具を持って来てやろう。)

アルシーテがパラモンに対して言うせりふです。ここではmeat and drinkは文字

通り「食物、飲み物」を意味しています。

And right anon, withouten wordes mo,  
This Nicholas no lenger wolde tarie,  
But dooth ful softe unto his chambre carie  
Bothe mete and drynke for a day or tweye, (MilT 3408-11)

(そしてすぐに、これ以上言うまでもなく、ニコラスはもはやそれ以上待とうともせずに、こっそりと彼の部屋に一、二日分の食糧や飲み水を運び込みます。)

大工の妻アリスンと関係を結ぶニコラスが部屋に閉じこもるときに、"meat and drink" (食糧や飲み水) を持ち込む場面です。ここでも文字通りの意味で使われています。

But specially I pray thee, hooste deere,  
Get us som mete and drynke, and make us cheere,  
And we wil payen trewely atte fulle. (RvT 4131-33)

(だが、特にお願いだが、親愛なる宿のご主人、何か食べ物と飲み物を持ってきてわれわれを元気にしてくれませんか。僕らはほんとに全部払うから。)

## 2. ディケンズのidiomとしての "meat and drink"

山本博士は、次の引用文のようにディケンズのイディオムに説明しておられます。ディケンズの言語に、シェイクスピアと並んでかなりたくさんの引用文を提供してきました聖書に目を向けなければなりません。同じように、もともと聖書の言語として使われたのですが、今では聖書のことを連想させなくなってしまいました所謂といわれます表現を識別する必要があります。次のような語句がこのようなセットフレーズに属しています。

"125. Here we should turn to the Bible which has afforded side by side with Shakespeare the greatest number of quotations to Dickens' language. Likewise in this case we must first discriminate those set-phrases which, though originally Biblical, have now lost the proper association. To these belong, for example, such words and phrases as are employed in the following.

.....

(Boulderby) "First of all, you see our smoke. That's meat and drink

to us." HT II 2 (cf. 'this was meat and drink to him', a great pleasure. COD. Cf. Rom. xiv 17: 'The kingdom of God is not meat and drink.') / (Lizzie) "I-I do not like it, father." -- "As if it wasn't your living! As if it wasn't meat and drink to you!" MF I 1 (here livelihood.)" (Yamamoto 1950: 245)

最初の引用文は、『ハード・タイムズ』に登場するバウンダビーが意気揚々と話すせりふです。「まず第一に、あんたにはこの町の煤煙が見えよう。それは、わしらにとって生きる楽しみともいうべきもんなんじゃよ。」(山村、竹村、田中訳『ハード・タイムズ』より)

次の引用文は、『互いの友』の冒頭の章に使われているもので、日常生活での生活に最小限必要な生活の糧を表しています。「え、ええ、いやよ、父さん」「てめえの食いぶちじゃねえってみてえにな。てめえが食ったり飲んだりしてるやつじゃねえってみてえにな」(田辺洋子訳『互いの友』より)

結局、ディケンズの "meat and drink" は、現実中存在する食べ物と飲み物のような「生きる楽しみ」や生活手段を意味するメタファー（隠喩）として使われています。前者では "our smoke"（この町の煤煙）が生きる楽しみになり、後者では川の顔を見ることが生活手段ということになります。ただし、ディケンズの "meat and drink" は他にも用例が見られますので、"meat" 一語だけの例を含めて、今後の研究課題とします。また、ディケンズ以外のテクストにも "meat and drink" が多く使われています。ディケンズの英語らしさを見出すために、そのような例も含めて "meat and drink" の意味論的な研究を継続的に続けていきます。

### 3. おわりに

このように、チョーサーからディケンズへのメタフォリカルなワードペアの用法について、"meat and drink"を例にとって見てきました。このように14世紀から19世紀まで約500年も経過していくうちに、文字通りに近い意味から、字義を感じさせながらも比喩的な意味に変化していることがわかりました。さらに、ディケンズの作品においても書かれた時期によってはメタファーの意味合いが異なります。つまり、いつも念頭においておかなければならないと思われまことは、どの時代のテクストを目の前にしましても、たえずその用法についてその周りに存在している様々な文脈を客観的に深く読み解くことです。